

# 伏見城跡・桃山古墳群

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 伏見城跡・桃山古墳群

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、住宅建設工事に伴う伏見城跡・桃山古墳群の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

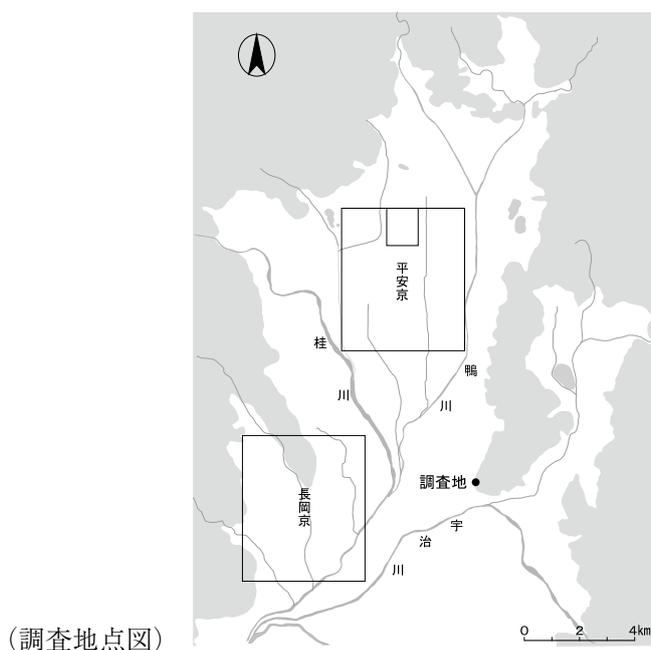
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成28年1月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- |                  |  |
|------------------|--|
| 1 遺 跡 名          | 伏見城跡・桃山古墳群（文化財保護課番号 15 F 154）  |
| 2 調査所在地          | 京都市伏見区桃山町島津47-25   |
| 3 委 託 者          | 柴田不動産株式会社 代表取締役 柴田潤子   |
| 4 調査期間           | 2015年9月28日～2015年10月20日   |
| 5 調査面積           | 168.0㎡   |
| 6 調査担当者          | 山下大輝   |
| 7 使用地図           | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「丹波橋」を参考にし、作成した。                               |
| 8 使用測地系          | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）   |
| 9 使用標高           | T.P.：東京湾平均海面高度   |
| 10 使用土色名<br>及び土性 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。<br>また、「土性」についての分類は同書「土壌調査用チャート」に準じた。 |
| 11 遺構番号          | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。   |
| 12 遺物番号          | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。  |
| 13 本書作成          | 山下大輝   |
| 14 備 考           | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。                              |



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と既往の調査	3
(1) 遺跡の位置と歴史的環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	5
(1) 層序	5
(2) 第1面の遺構	5
(3) 第2面の遺構	9
4. 遺 物	14
(1) 土器類	14
(2) 瓦類	16
(3) 石製品	16
5. ま と め	17

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区第1面全景（北から）
		2	1区第2面全景（北東から）
図版2	遺構	1	1区石垣抜取跡3中央断面（北から）
		2	1区石垣抜取跡3（北東から）
		3	1区石垣抜取跡3根石（北から）
図版3	遺構	1	2区全景（北東から）
		2	2区石垣2検出状況（東から）
		3	2区石垣2基底部（北から）
		4	2区石垣2東西石列検出状況（南西から）
図版4	遺物		土器類・瓦類

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前風景（北東から）	2
図4	重機掘削風景（北東から）	2
図5	1区北壁・東壁断面図（1：50）	6
図6	第1面遺構平面図（1：150）	7
図7	2区平面図、東壁・南壁断面図（1：50）	8
図8	2区石垣2実測図（1：30）	9
図9	1区石垣抜取跡3平面図、北壁・西壁・南壁断面図（1：60）	10
図10	1区東西セクション断面図（1：50）	11
図11	第2面遺構平面図（1：150）	12
図12	1区塀4実測図（1：50）	13
図13	出土土器類実測図（1：4）	15
図14	出土瓦拓影・実測図（1：4、21・22のみ1：6）	15
図15	出土硯実測図（1：4）	16
図16	出土硯	16
図17	石垣2・石垣抜取跡3雛壇造成復元模式図（1：200）	17

## 表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	14

# 伏見城跡・桃山古墳群

## 1. 調査経過（図1・2）

今回の調査は、京都市伏見区桃山町島津47-25のマンション計画に伴い実施したものである。調査地は、『京都市遺跡地図』によると伏見城跡及び桃山古墳群にあたる<sup>1)</sup>。安土桃山時代における当調査地一帯は、伏見城城下町に含まれ大名屋敷が建ち並ぶ区域であったことが、文献や絵図による研究や発掘調査成果から明らかになっている。江戸時代に描かれた伏見城下の絵図は諸図あるが、その多くに調査地を含む区画には「島津右馬頭」と記されている。

発掘調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）によって試掘調査が実施され、その結果、調査地東半で伏見城期の遺構が確認された。このため開発計画地敷地内の東半分が調査範囲として決定された。また、これまでの周辺調査の成果から、調査地西側を通る伊達街道に沿う部分では、城下町の道路と屋敷地を分ける石垣の検出が予測されたため、開発計画地西端にも調査区の設定が決定された。

発掘調査は、調査地東側トレンチを1区、西側トレンチを2区として行った。調査の結果、1区

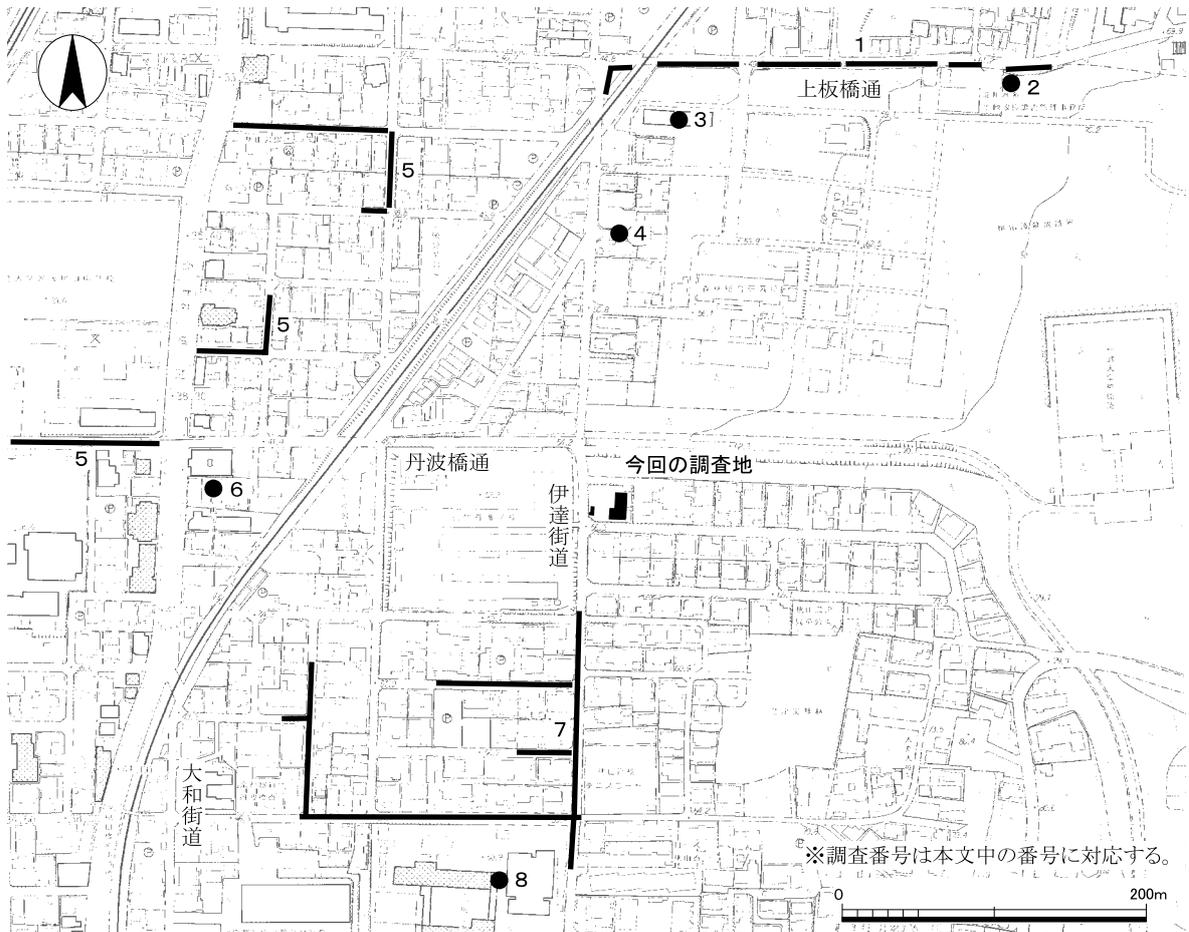


図1 調査位置図（1：5,000）

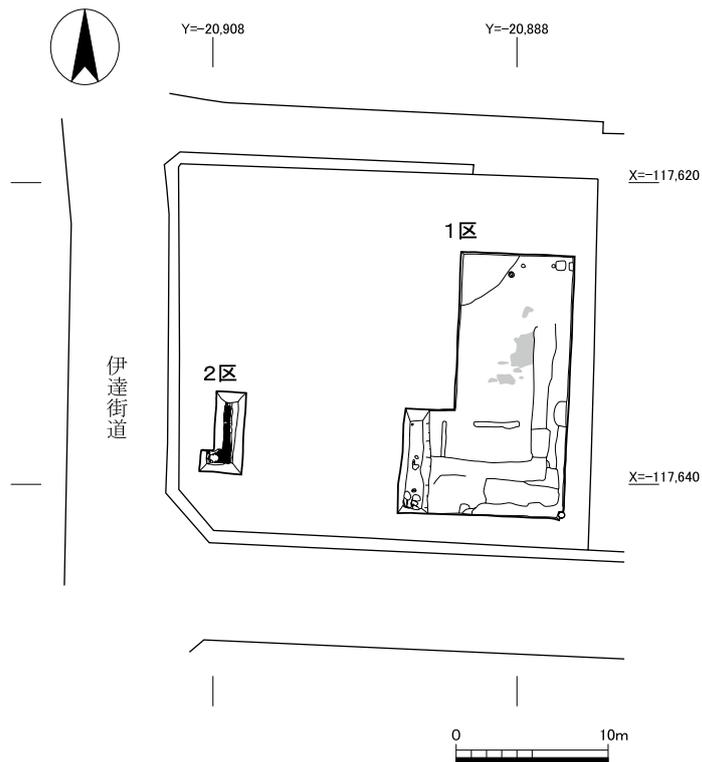


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 調査前風景 (北東から)



図4 重機掘削風景 (北東から)

では安土桃山時代の焼土面や石垣抜取跡を確認した。また2区では伊達街道と屋敷地を画する石垣の裏込を検出した。この裏込の検出から石垣本体の検出が見込まれたため、2区南側で西側に拡張を行ったところ、石垣基部を検出した。

発掘調査は、1・2区ともに平成27年9月28日から開始し、10月20日に終了した。

## 2. 位置と既往の調査

### (1) 遺跡の位置と歴史的環境

調査地のある伏見では、縄文時代以降の遺構・遺物が確認されており、連綿と人々の営みが続いていることが明らかとなっている。その歴史の中で最も大きな画期は、豊臣秀吉による伏見城の造営である。

伏見城は、文禄元年（1592）の豊臣秀吉の隠居所として造営が始まるが、その歴史は大きく4期に分類されている<sup>2)</sup>。第Ⅰ期は、指月の丘（現在の観月橋団地一帯）に豊臣秀吉が隠居城として築城する段階、第Ⅱ期は城郭への拡張から文禄5年（1597）の大地震で倒壊するまでを指す。第Ⅲ期は大地震後、指月の丘より北北東に位置する木幡山に城郭主要部を移して築城され、慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いの前哨戦で焼失するまでを指す。第Ⅳ期は徳川家康によって再建されたものであり、場所は第Ⅲ期を踏襲する。その後の伏見城は、江戸幕府3代将軍徳川家光までの将軍宣下式が行われるなど、京都における幕府の拠点として機能するが、二条城築城後はその役割を終え元和9年（1623）に廃城となる。廃城後の丘陵西斜面の大名屋敷地一帯は、田畑として開発が進められ、寛永2年（1625）に堀内村が成立、その後、伏見奉行の支配下になった。村内には傾斜地が多く、桃が植えられ、実が収穫されたという。元禄年間には、桃花の名所として「桃山」と呼称され、儒学者貝原益軒の『京城勝覧』で紹介されている。

### (2) 周辺の調査（図1）

伏見城跡では、試掘・立会を含む多くの発掘調査が行われている。調査地周辺は、既往の調査や研究により、大名屋敷地の一画と考えられている。ここでは調査地周辺の主な成果について述べる。

調査1は安土桃山時代の上板橋通及び伊達街道拡幅工事に伴う東西石垣・南北石垣、石組溝、犬走、路面、溝が検出されている。出土遺物は安土桃山時代の土師器、陶器、銭貨、石製品（石仏）、瓦類などがある<sup>3)</sup>。

調査2は安土桃山時代の礎石建物、井戸などが検出された。出土遺物は、安土桃山時代の土器・瓦類の他に古墳時代の須恵器や円筒埴輪、形象埴輪などがあり、付近に古墳の存在が推定される<sup>4)</sup>。

調査3は古墳の墳丘のほか、安土桃山時代の井戸、瓦溜、江戸時代の礎石建物、墓坑などが検出された。出土遺物は、安土桃山時代の瓦類、江戸時代の土師器、銭貨、骨片の他に古墳時代の土師器、須恵器、埴輪などが出土した<sup>5)</sup>。

調査4は安土桃山時代の南北方向の石組溝、築地、犬走、路面、礎石建物、廊状遺構が検出されている。城下町の名古屋敷と考えられる。出土遺物は、安土桃山時代の土師器、陶器、有機物（焼米）、鉄製品、弾丸などがある。南北方向の石組溝は伊達街道の東側溝に、礎石建物は大名屋敷に伴うものとされる<sup>6)</sup>。

調査5は立会調査で、国道24号線から西に下がる丹波橋通南側で安土桃山時代の東西方向の石組溝が検出され、道路に沿った石組側溝の一部とみられている<sup>7)</sup>。

調査6は安土桃山時代の石組側溝、石垣基礎、礎石、柵列などが検出されている。出土遺物は安土桃山時代の土師器、施釉陶器、焼締陶器、江戸時代の焼締陶器などが出土している。南北方向の石組側溝と石垣基礎は、大和街道に伴うものとみられている<sup>8)</sup>。

調査7は立会調査で、安土桃山時代の連続する溝、建物を画す南北溝と西側の溝が検出されている。建物規模は南北間の距離から21 mと想定されている<sup>9)</sup>。

調査8では、安土桃山時代の遺構面が確認され、大規模な礎石建物が検出されており、大名屋敷の建物跡と考えられている。

### 3. 遺 構

#### (1) 層序 (図5)

調査地の現地表面は北東に高く南西に低くなっており、標高58～60mである。

基本層序は1区北壁の東端付近を基準として述べる。現地表面から0.01mまでが現代盛土、0.05mまでが焼土層、0.4mまでが安土桃山時代の整地層、0.4m以下が大阪層群由来の明赤褐色シルト質埴壤土で地山である。安土桃山時代の整地層は、砂層とシルト混じりの砂礫層が交互に重なり形成され、整地層上面は浅黄橙色砂土で固く締まっている。

調査は、安土桃山時代の整地層上面(第1面)、地山(第2面)の2面に分けて行った。以下に各面の遺構について述べる。

#### (2) 第1面の遺構 (図6、図版1-1)

第1面では、礎石1、石垣2、石垣抜取跡3を検出した。遺構面上面の一部では赤く変色した被熱面を確認している。

**礎石1** 1区の北部で検出した礎石。掘形の平面形は円形を呈し、掘形直径約0.4m、深さは約0.1mを測る。礎石は長さ0.2m、幅0.18m、厚さ0.08mを測る。平らな石の上面を水平になるように据えられている。他に礎石は検出していないが、石の設置状況から考えて建物の礎石と考えられる。掘形埋土から瀬戸・美濃の小皿が出土した。

**石垣2** (図7・8、図版3) 2区で検出した伊達街道と屋敷地を画する南北方向の石垣。2区のほぼ全域で裏込を検出し、南東拡張部では石垣の基底部分の積石を上下2段検出した。下段の石の下にはさらに根石の存在を確認した。積石検出長は南北約0.8m、高さ0.8mである。残存部の傾斜は約70度である。石垣に使用された石は自然石で長さ0.6～0.95m、幅約0.55m、厚さ0.2～0.4mである。石材は検出した5石のうち4石がチャート、1石が花崗岩であった。矢穴は、認められなかった。石垣前面では固く締まる面を検出しており、この面が当時の地表面と思われる(図7-17層)。裏込の崩落土がこの上面に堆積することもそのことを傍証する。検出した石垣は、上段の石の中位より下まで掘り込まれ、石垣の基底部分を形成している。基底部分より上の積石は、抜き取られているが、基底石より約0.8m上まで裏込が存在することから、本来この高さまで石垣が存在したことがわかる。

基底石背面の裏込下層では、長さ約0.4～0.5m、幅約0.4～0.5m、厚さ約0.5mの石を東西に並んだ状態で3石検出した。この3石は、地山面を掘り込んで据えられている。このうち最西部の石

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
安土桃山時代	礎石1、石垣2、石垣抜取跡3、塀4、土坑17	



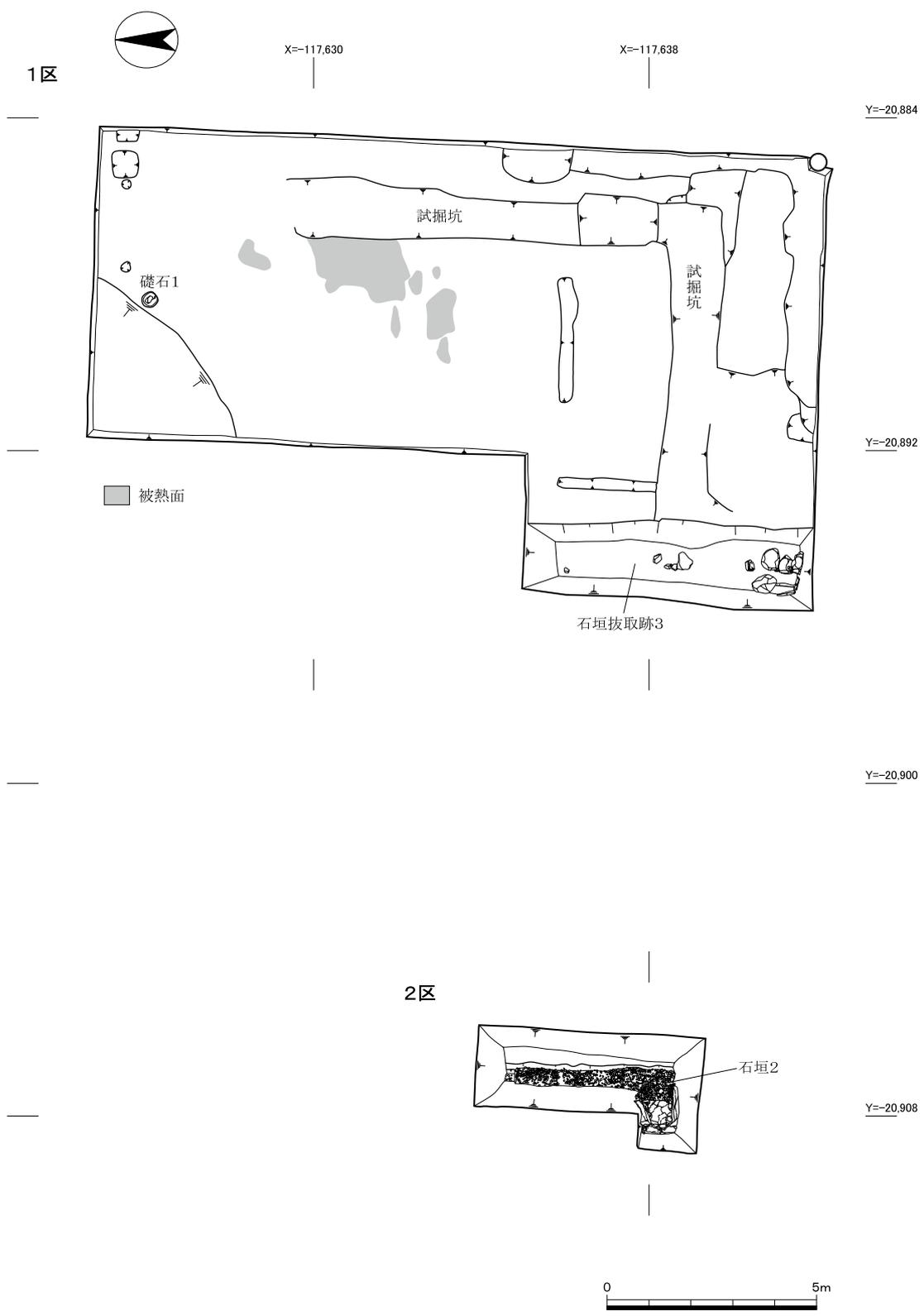
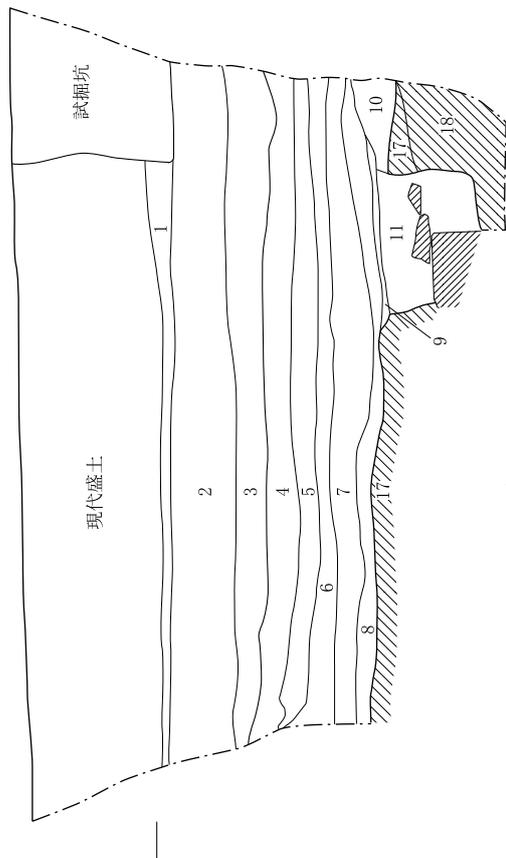


図6 第1面遺構平面図 (1 : 150)

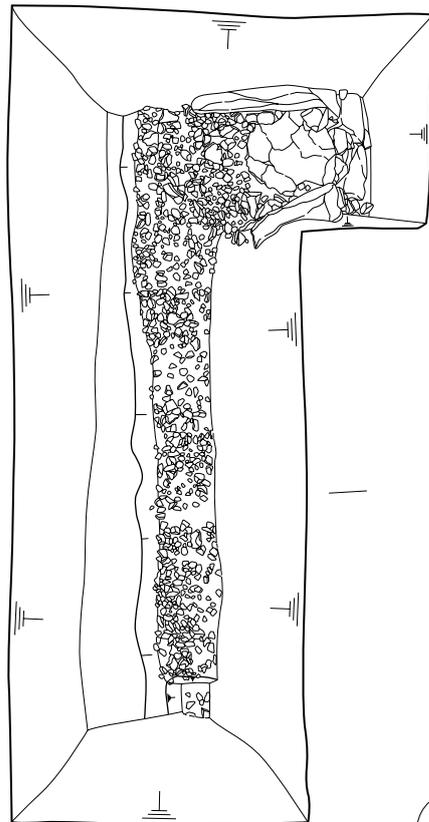
X=117.636



- 1 5YR5/6明赤褐色 砂礫土 φ1.0~3.0cmの礫微量
- 2 7.5YR4/6褐色 砂土 φ1.0~4.0cmの礫中量
- 3 10YR4/4褐色 シルト質埴土 φ1.0cmの礫微量
- 4 7.5YR5/6明褐色 シルト質埴土 φ1.0~4.0cmの礫中量
- 5 5YR5/6明赤褐色 シルト質埴土
- 6 5YR5/6明赤褐色 シルト質埴土 φ1.0~4.0cmの礫微量
- 7 7.5YR5/6明褐色 シルト質埴土 φ3.0~5.0cmの礫微量
- 8 7.5YR4/6褐色 埴土 φ1.0~4.0cmの礫中量
- 9 2.5YR7/4浅黄色 砂礫土
- 10 7.5YR5/6明褐色 砂礫土
- 11 5YR5/6明赤褐色 シルト質埴土 φ1.0~3.0cmの礫中量
- 12 7.5YR4/6褐色 シルト質埴土 φ1.0~10.0cmの礫多量(裏込崩壊層)
- 13 5YR5/6 明赤褐色 シルト質埴土 φ1.0~10.0cmの礫多量(裏込崩壊層)
- 14 5YR5/6 明赤褐色 重埴土 固く締まる
- 15 7.5YR4/6 褐色 シルト質埴土 φ1.0~10.0cmの礫多量、固く締まる
- 16 7.5YR5/6 明褐色 シルト質埴土 φ5.0~10.0cmの礫多量
- 17 5YR4/6 にぶい赤褐色 重埴土 φ1.0~3.0cmの礫微量
- 18 10YR5/8黄褐色 埴土 φ1.0~5.0cmの礫少量

H=58.0m

X=117.636



Y=20.908

Y=-20.908

現代盛土

H=58.0m

2m

0



図7 2区平面図、東壁・南壁断面図(1:50)

は、基底石第2段の背面と接していることから、石垣基底石後背部の支えとして設置された可能性がある。裏込の中から安土桃山時代の瓦類が出土した。なお、石垣の積石は安全上の理由から、取り上げは行っていない。

**石垣抜取跡3**（図9・10、図版2） 1区南西部で検出した南北方向に延びる抜取跡である。石垣抜取跡は、東から西へと下がる段差として検出した。その比高差は1.8mである。石垣の積石は検出されなかったが、抜取跡底面の南半部では根石と裏込を検出した。根石は長さ約0.45～0.55m、幅約0.35～0.4m、厚さ約0.18～0.24mである。石材は花崗岩とチャートが使用されている。根石は地山面を掘り込んで設置されている（図9-27層）。裏込は根石の上層で検出しているが、積石の抜き取り後に崩れたもの（図9-23～25層、図10-8・9層）と原位置を保つもの（図9-26層、図10-10層）とに分かれる。根石前面で検出した石は石垣積石の抜き取り時に、根石や間詰石が転落したものであると思われる。なお、根石は安全上の理由から、取り上げは行っていない。

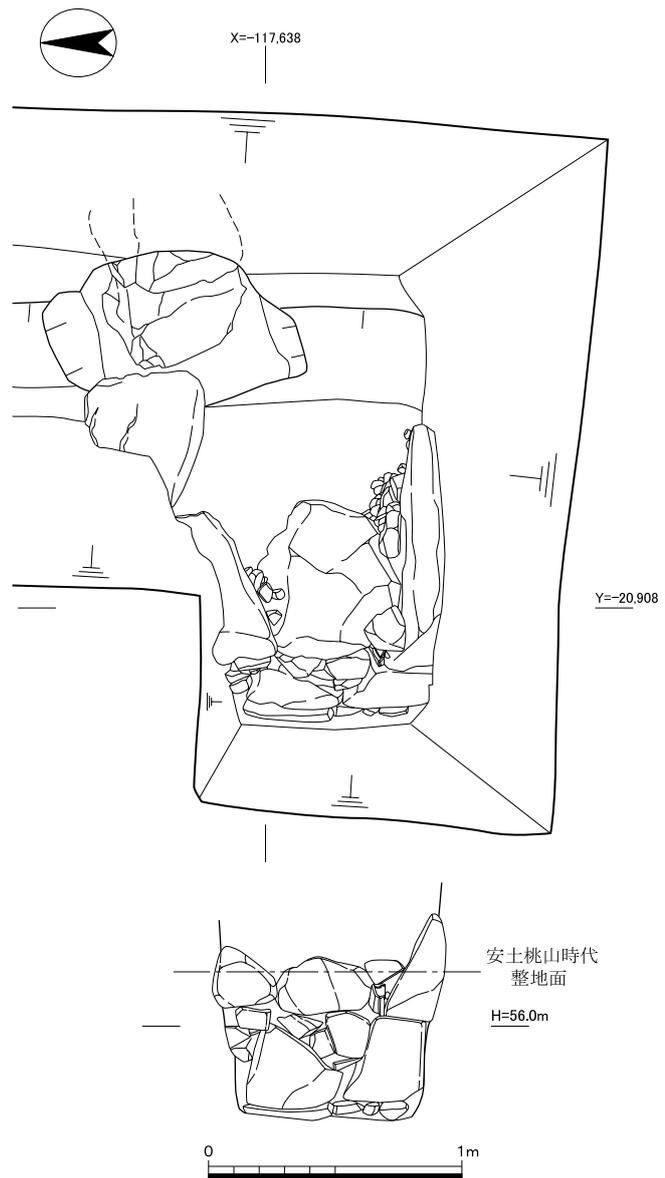


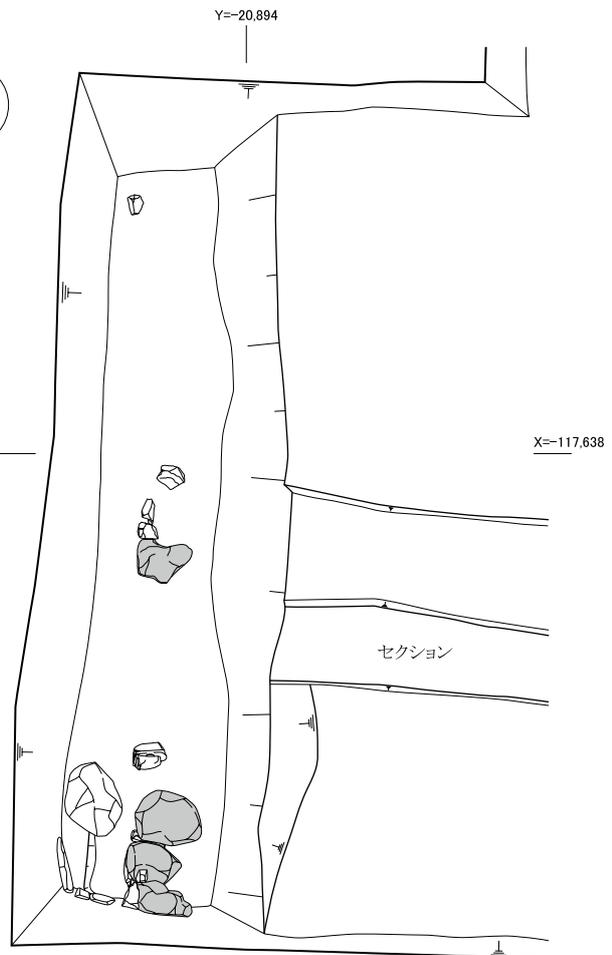
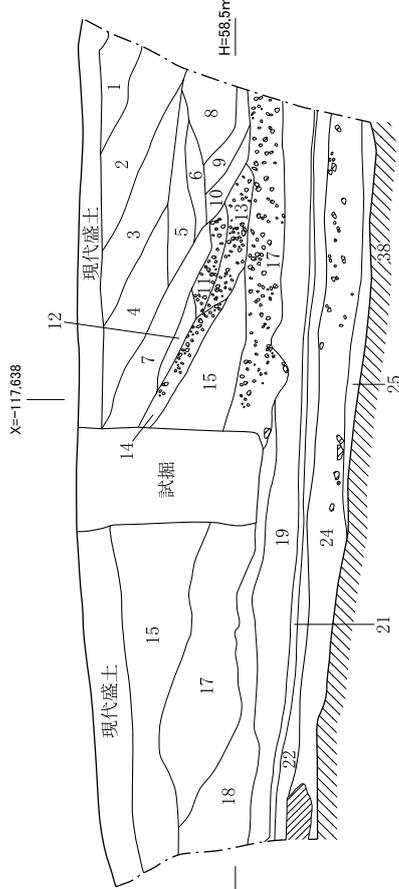
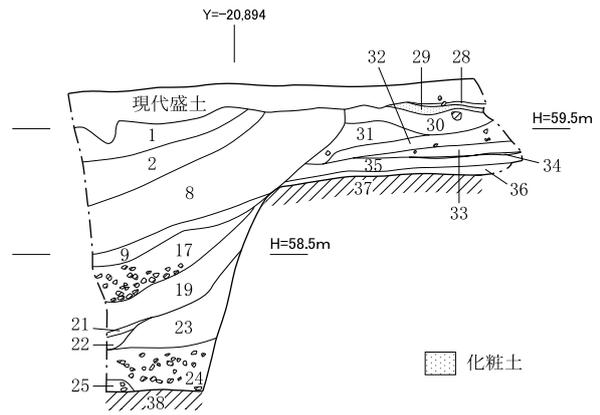
図8 2区石垣2実測図（1：30）

### （3）第2面の遺構（図11、図版1-2）

第2面は地山面で確認した。塀4を検出した。

**塀4**（図12） 1区東壁付近で検出した南北方向の柱穴列。柱掘形の平面形は円形を呈し、直径は0.6～0.7mである。深さは、浅いものと深いものが交互に存在し、柱穴13は約0.3m、柱穴14は約0.7m、柱穴15が約0.4m、柱穴16が約0.7mである。塀4の柱穴の多くは地山面で検出したが、柱穴13は整地層第1層（図5-2層）の下面、整地層第4層（図5-17層）上面で検出した。柱穴13の埋土は整地層第4層（図5-17層）とほぼ同質の土であった。これらのことから塀4は、土地造成過程において仮設的に構築されたものである可能性がある。遺物は、柱穴13埋土から信楽の播鉢が出土した。

- 1 10YR7/3にぶい黄褐色 砂土 φ1~3cmの礫中量
- 2 10YR6/6明黄褐色 砂土 φ1~3cmの礫中量
- 3 10YR7/4にぶい黄褐色 砂土 φ1~2cmの礫中量
- 4 10YR6/6明黄褐色 砂土 φ0.5~1cmの礫多量
- 5 10YR6/6明黄褐色 砂土 φ0.1~3cmの礫多量
- 6 10YR5/6黄褐色 砂土 φ1~4cmの礫中量
- 7 10YR5/6黄褐色 砂土 φ0.5~4cmの礫多量
- 8 10YR6/6明黄褐色 砂土 φ1~2cmの礫中量
- 9 10YR6/3にぶい黄褐色 砂土 φ1cmの礫多量
- 10 10YR7/4にぶい黄褐色 砂土 φ1~2cmの礫少量
- 11 7.5YR5/6明褐色 シルト質埴土 φ1~2cmの礫多量
- 12 10YR5/6黄褐色 砂土 φ0.5~1cmの礫多量
- 13 7.5YR5/6明褐色 シルト質埴土 φ2~5cmの礫多量
- 14 10YR6/6明黄褐色 砂土 φ0.2cmの礫多量
- 15 7.5YR5/6明褐色 砂埴土 φ0.5~1cmの礫多量
- 16 7.5YR4/3褐色 砂埴土 φ1~3cmの礫中量
- 17 7.5YR4/6褐色 砂土 φ~4cmの礫中量
- 18 5YR5/6明赤褐色 シルト質埴土 φ~1cmの礫少量
- 19 7.5YR5/6明褐色 シルト質埴土  
φ6cmのブロック土混 φ2~4cmの礫少量
- 20 5YR5/6明赤褐色 シルト質埴土 φ1~4cmの礫中量



- 21 2.5Y8/4淡黄色 シルト質埴土
- 22 7.5YR5/6明褐色 シルト質埴土
- 23 7.5YR5/6明褐色 シルト質埴土
- 24 7.5YR5/6明褐色 シルト質埴土 φ1~2cmの礫少量 裏込崩壊層
- 25 7.5YR5/6明褐色 軽埴土
- 26 7.5YR4/6褐色 砂埴土 φ4~10cmの礫多量(裏込)
- 27 7.5YR4/6褐色 壤質砂土 φ2~5cmの礫若干(基底部掘形埋土)
- 28 7.5YR5/4にぶい褐色 壤質砂土(焼土)
- 29 7.5YR8/2灰白色 砂土(化粧土)
- 30 5YR5/6明赤褐色 砂埴土 φ1cmの礫若干 固く締まる
- 31 7.5YR5/6明褐色 砂埴土 φ1~2cmの礫中量 固く締まる
- 32 7.5YR6/6橙色 砂土 φ1~2cmの礫多量
- 33 7.5YR5/6明褐色 砂埴土 固く締まる
- 34 7.5YR8/4浅黄褐色 砂土
- 35 5YR5/6明赤褐色 砂埴土 φ1~3cmの礫多量
- 36 7.5YR5/8明褐色 シルト質埴土
- 37 5YR4/8赤褐色 シルト質埴土 地山
- 38 10YR6/6明黄褐色 砂埴土

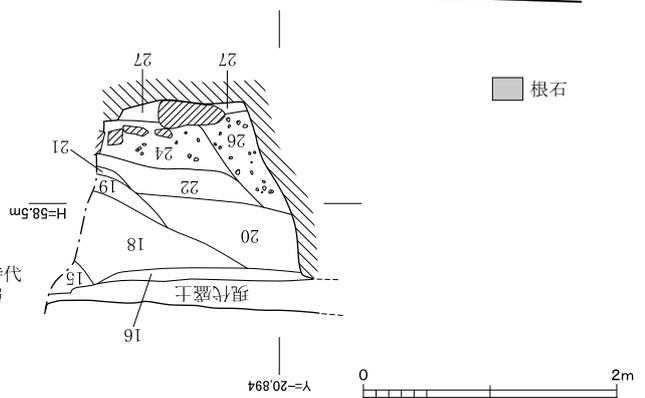
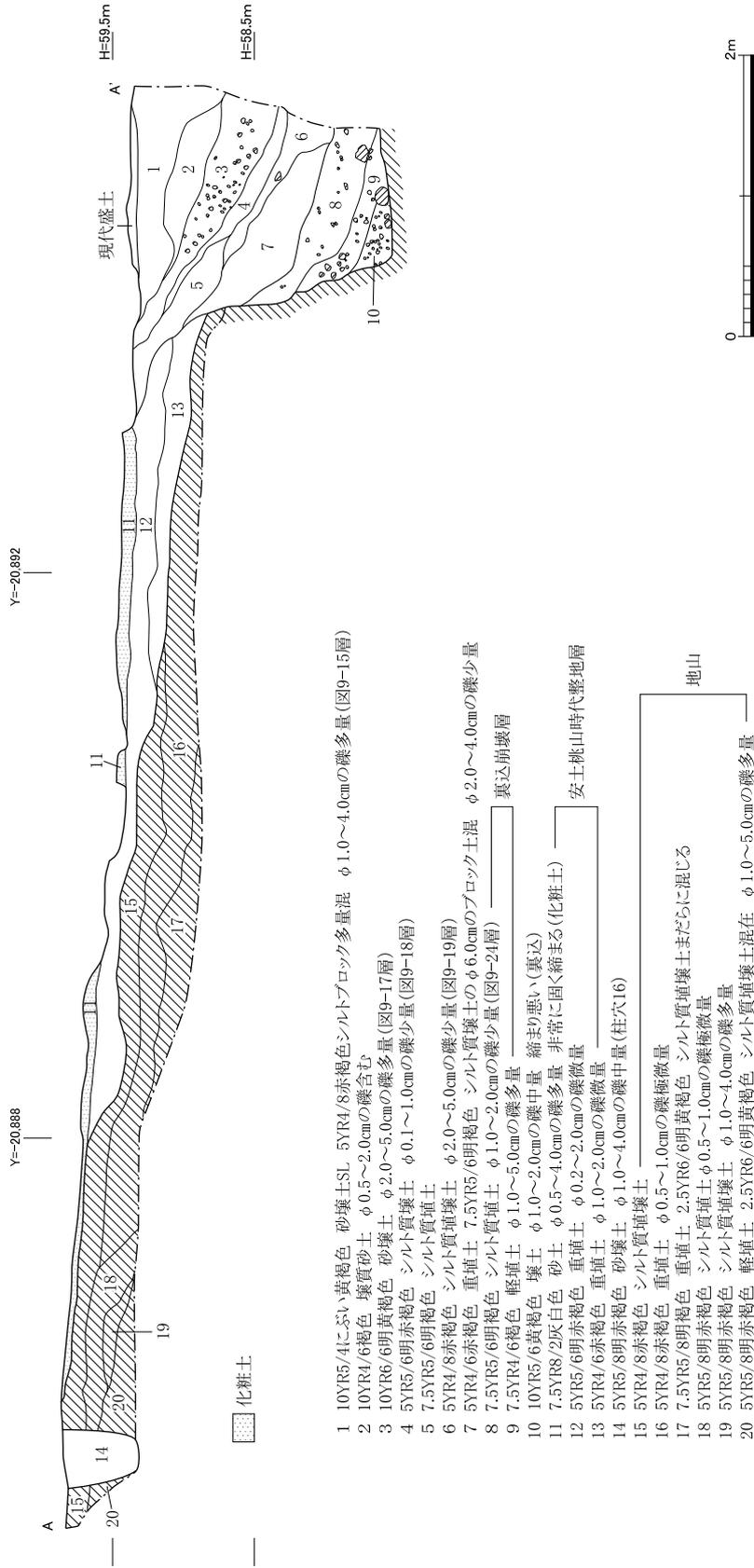


図9 1区石垣抜取跡3平面図、北壁・西壁・南壁断面図(1:60)



※A-A'は図11に対応

図10 1区東西セクション断面図 (1:50)

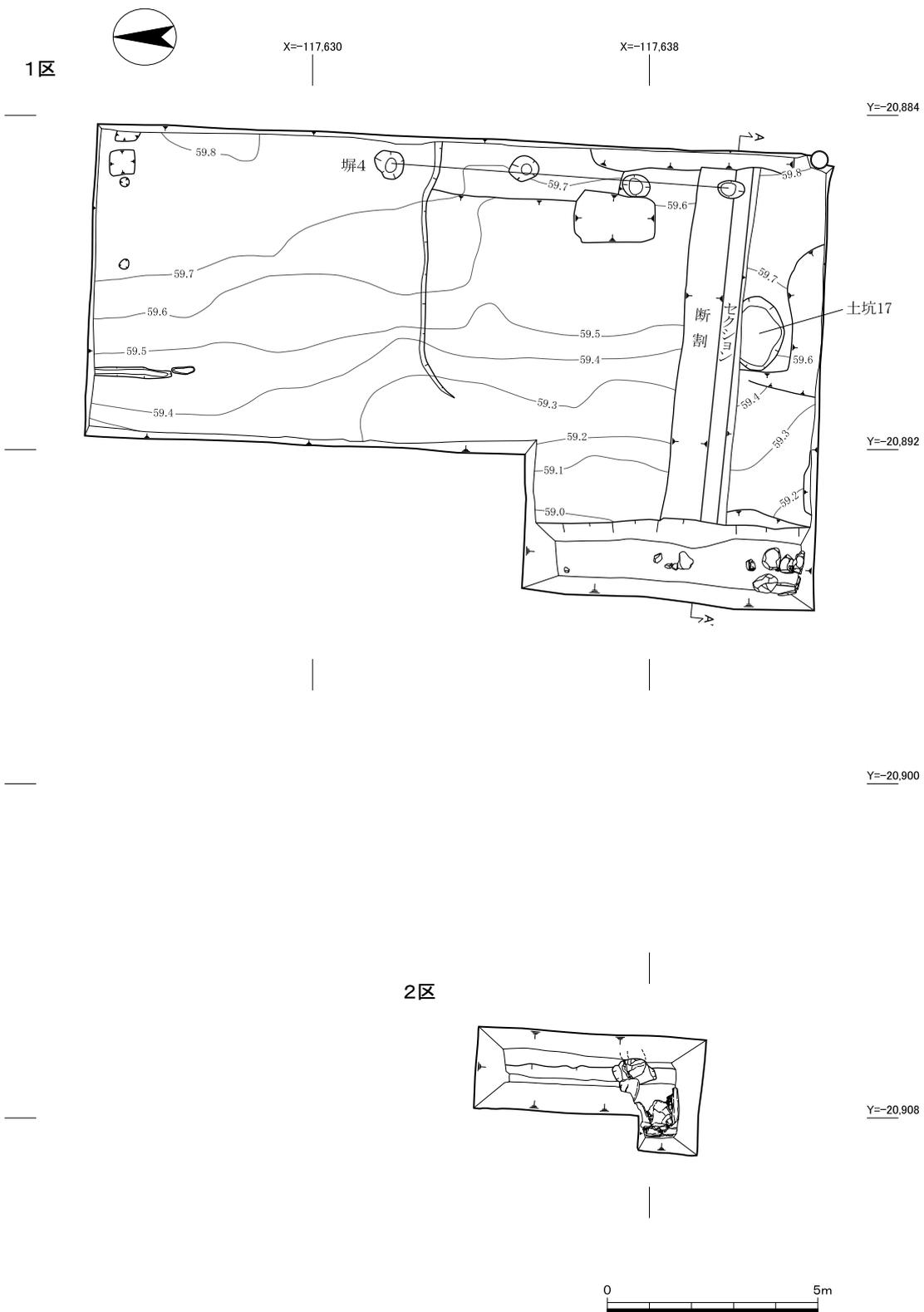


図11 第2面遺構平面図 (1 : 150)

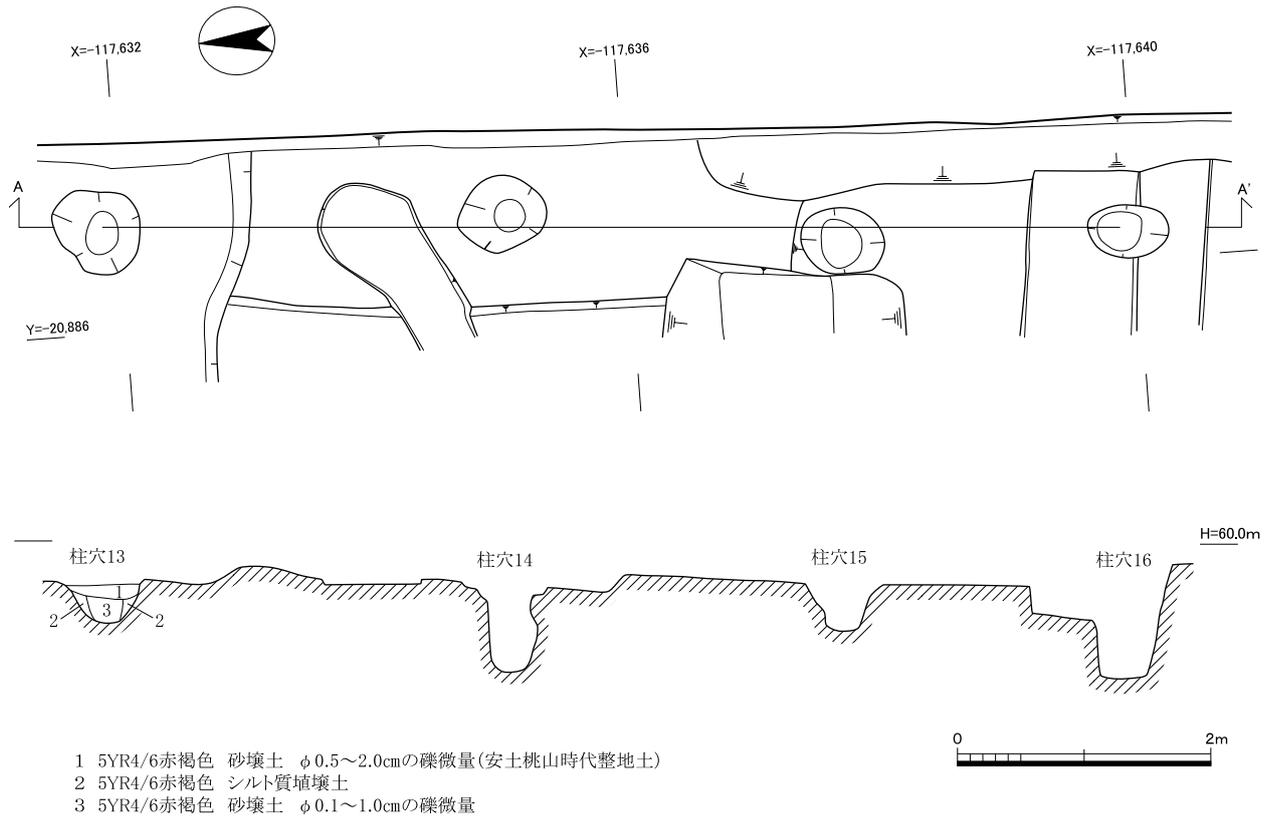


図12 1区塀4実測図(1:50)

土坑17 1区南部で検出した土坑。検出部分の平面形は半円形を呈する。遺構は南半部のみを検出しており、北半部は土層観察セクション、試掘坑により確認できていない。直径は約2.0mである。埋土は赤褐色壤土である。安土桃山時代と思われる平瓦片が2点出土した。土取り穴の可能性も考えられるが、遺構の性格については不明である。

## 4. 遺 物

遺物は、古墳時代・安土桃山時代・江戸時代の土器・瓦類・石製品が出土した。時期別に出土量をみると、最も多いのは安土桃山時代、次いで江戸時代、古墳時代となる。遺構別にみると、1区では安土桃山時代整地層からの出土がその多くを占める。2区では石垣裏込石埋土から、安土桃山時代の瓦類が一定量出土した。

### (1) 土器類 (図13、図版4)

1は土師器の皿である。平坦な底面から口縁部は外反しながら立ち上がる。また内面底面と口縁の境には圈線が巡る。内外面全体に油煙が付着していることから灯明皿として使用されていたことがわかる。1区遺構検出中に出土した。

2は瓦器の羽釜である。内外面ともにヨコナデによる調整が施されている。鏝部は貼り付け成形で、鏝部先端はやや反り気味である。1区整地層から出土した。3は瓦器の鉢である。内外面ともにナデによる調整が施される。1区整地層から出土した。

4～6は瀬戸・美濃の丸皿である。高台内面以外は淡黄色の釉薬が施釉されるが、器面には光沢がない。6は高台内面を除く全面に灰釉が施釉される。4～6はいずれも高台内には輪トチン痕が残る。4は礎石1、5・6は1区整地層からの出土である。7は瀬戸・美濃の折縁ソギ皿である。内外面には灰釉が施釉される。1区整地層からの出土である。8は瀬戸・美濃の天目茶椀である。体部は外側に開きながら立ち上がり、口縁部がわずかに屈曲し、端部は丸く収まる。内面と外面体部上半まで施釉されている。1区整地層からの出土である。

9は焼締陶器信楽の播鉢である。播り目は6条1単位で、単位間隔は広い。塀4の柱穴13からの出土である。

10は須恵器杯身である。外面底部中央が凹み、それに対応して内面底部中央は膨らむ。胎土には0.1cm～5.0cmの長石が多く含まれる。1区地山直上からの出土である。TK217型式と考えられる。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
古墳時代	須恵器		須恵器2点		
安土桃山時代	土師器、瓦器、施釉陶器、 焼締陶器、軒瓦、金箔瓦、 丸瓦、石製品		土師器1点、瓦器2点、施釉陶器 5点、焼締陶器1点、軒丸瓦3点、 軒平瓦5点、金箔瓦1点、丸瓦2 点、石製品1点		
江戸時代	染付				
合 計		8箱	23点(2箱)	1箱	5箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A・Bランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

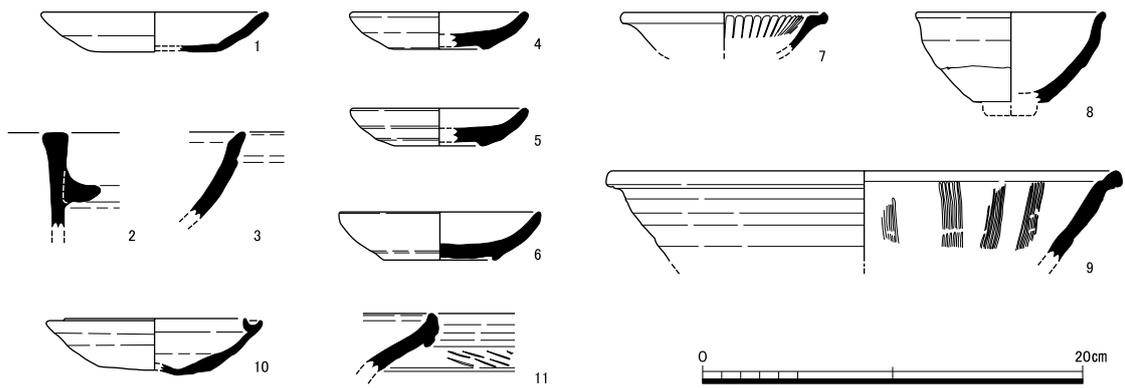


図13 出土土器類実測図（1：4）

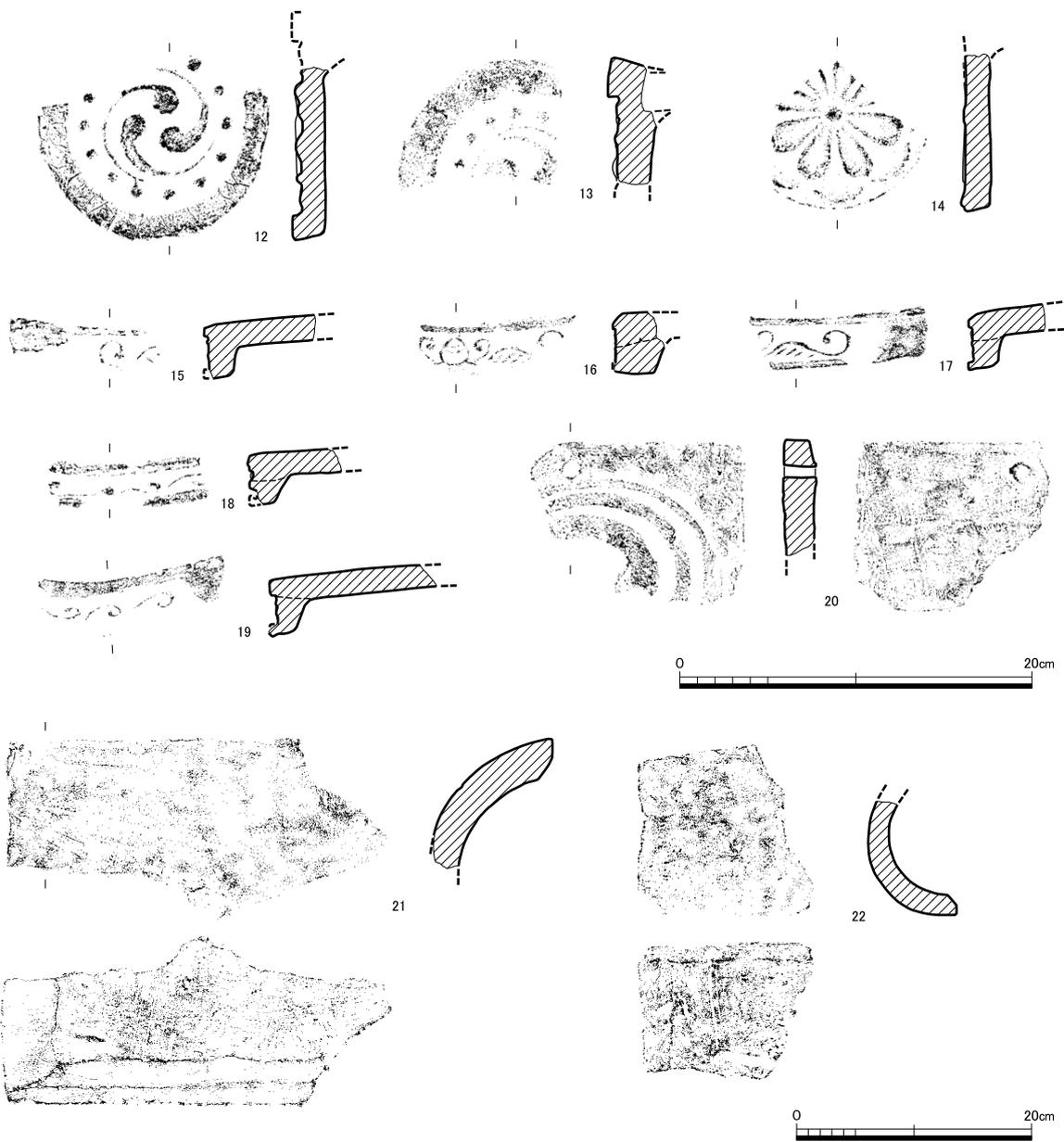


図14 出土瓦拓影・実測図（1：4、21・22のみ1：6）

11は須恵器甕の口縁部である。裾部には右上から左下へと斜行するヘラ描き沈線が連続して施される。詳細な時期の特定は難しいが古墳時代後期とみられる。1区地山直上からの出土である。

## (2) 瓦類 (図14、図版5)

12は右巻き三巴文軒丸瓦である。外区に珠文を配する。巴文の尾と珠文の間に範傷が確認できる。瓦当裏面は、丸瓦との接合部付近と瓦当部裏面下縁部にヨコナデを施す。石垣2裏込からの出土である。13は右巻き三巴文軒丸瓦である。外区に珠文を配する。巴文の尾と尾が結合し、圏線状になる。瓦当裏面には丸瓦との接合部付近と瓦当部裏面下縁部にヨコナデを施している。2区遺構検出中に出土した。14は八弁菊文瓦である。瓦当面の直径は、他の軒丸瓦と比較して一回り小さい。瓦当部裏面下縁部にはヨコナデを施す。石垣2裏込からの出土である。

15～17は同範の均整唐草文軒平瓦である。15～17の破片を重ね合わせると、瓦当文様全体の復元が可能である。中心飾は宝珠文、第2唐草文の下にある右下がりの直線文が特徴的である。いずれも石垣2裏込からの出土である。18は唐草文軒平瓦である。中心飾は珠文である。石垣2裏込からの出土である。19は唐草文軒平瓦である。中心飾は欠けているが、唐草文は3回反転することがわかる。石垣2裏込からの出土である。

20は金箔押飾瓦<sup>11)</sup>である。板状を呈し、厚さは1.85cmである。文様はやや扁平な巴文である。裏面には縦方向に複数のカキメが施されている。金箔は巴文の一部に残存する。石垣2裏込からの出土である。

21・22は丸瓦である。いずれも凹面にはコビキ痕が残り、21はコビキA、22はコビキBである。21は1区整地層から、22は石垣2裏込からの出土である。

## (3) 石製品 (図15・16、図版5)

23は1区の安土桃山時代整地層から出土した小型の硯である。残存長は縦3.8cm、横4.3cm、厚さ0.8cmを測る。縁部と側面は磨かれ滑らかに仕上げられている。石材は粘板岩で全体に明灰色を呈するが、縁部と側面上部は赤褐色である。石材の色調の異なる部分を利用して装飾性を持たせている。

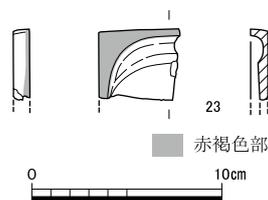


図15 出土硯実測図(1:4)

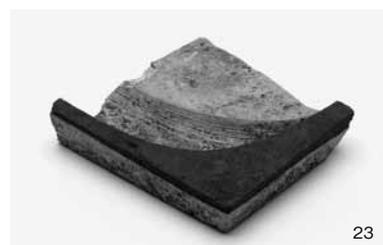


図16 出土硯

## 5. まとめ (図17)

今回は伏見城下町の大名屋敷地と推定される一画で発掘調査を行った。1区では安土桃山時代の整地面を確認し、南北方向の石垣抜取跡3・堀4、2区では伊達街道に伴う南北方向の石垣2を検出した。ここでは、石垣2と石垣抜取跡3の機能などについて以下に述べる。

石垣抜取跡3は、石垣の積石は抜き取られて残っていなかったが、根石と裏込を検出した。裏込が崩落したと思われる土層が根石列上面を覆っていることから、石垣の積石は、ある時期に根石を一部残し完全に抜き取られたことがわかる。また石垣抜取跡3の東肩の標高は59.3mであり、根石設置面の標高は57.5mである。この比高差1.8mが、石垣の復元高と考えられる。

石垣2は、石垣基底部の2段の石積と裏込を検出した。石垣の特徴としては、石材はチャートを主とし、間詰石を多用している、若干の勾配を持たしている点などが挙げられる。石垣基底石の設置面標高は55.6mで、裏込の検出最上部標高は57.3mであることから、少なくとも石垣の高さが1.7mはあったことが想定される。

石垣2と石垣抜取跡3の位置関係としては、石垣2と石垣抜取跡3は東西に並行し、その間の距離は約13mである。石垣抜取跡3の根石設置面標高が57.5m、石垣2の背面整地層最上部の標高は57.3mであり、石垣2の背面整地層最上部が0.2m程若干低い、ほぼ同じ高さとなる。このことから石垣2と石垣抜取跡3との間に平坦面が造成されていたとみられ、これら2列の石垣は併存していたと考えられる。また石垣2の高さを石垣抜取跡3の復元高と同じ1.8mとすると、本来の石垣2の最上部と石垣抜取跡3の設置面はほぼ同じ高さとなる。以上のことから、石垣2と石垣抜取跡3の2つの石垣は、桃山丘陵の斜面地に屋敷地を雛壇状に造成するために構築された石垣と考えることができる。

また石垣2は、現存の伊達街道東辺とほぼ同じ位置にある。既往の周辺調査(図1-調査1・4~7)でも現在の道路端とほぼ同じ位置で、道路と屋敷地の境となる石垣や道路側溝などを検出している。調査地周辺の街区は、安土桃山時代に伏見城下町が整備されてから400年以上経った現在も、ほぼ踏襲されているということがいえる。

以上のように、調査地の伊達街道に面した大名屋敷地の整備にあたっては、丘陵斜面地に対して雛壇状の土地造成を行い平坦面を確保していたことを明らかにした。これは伏見城に伴う大名屋敷の構成、空間利用などを検討していく上で、重要な成果であったと考える。今後、さらに蓄積さ

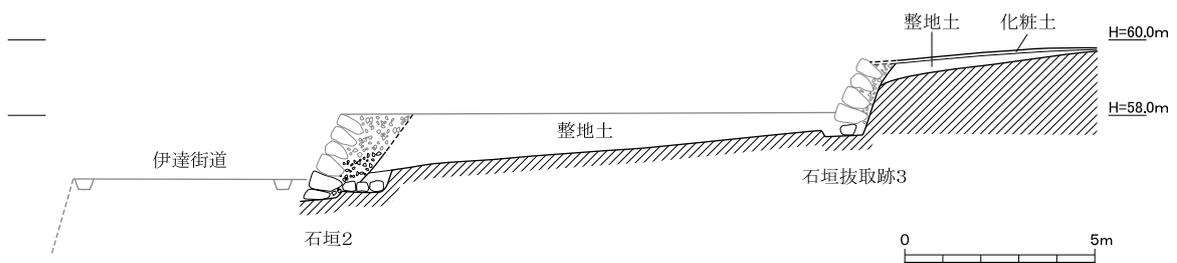


図17 石垣2・石垣抜取跡3雛壇造成復元模式図(1:200)

れるであろう伏見城跡の発掘調査成果に期待して報告書のまとめとしたい。

註

- 1) 『京都市遺跡地図』第8版 京都市文化市民局 2007年
- 2) 中井 均「伏見城と豊臣・徳川初期の城郭構造」『ヒストリア』大阪歴史学会 2010年
- 3) 小松武彦「伏見城跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 4) 平方幸雄「伏見城跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 5) 「伏見城跡3」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 6) 久世康博「伏見城跡 (FD32)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年  
久世康博「伏見城跡1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 7) 吉村正親「伏見城跡1」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 8) 平田 泰・布川豊治『伏見城跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007 - 10』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 9) 吉村正親「伏見城跡2」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 10) 岩松 保「伏見城跡平成5年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第59冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査センター 1994年
- 11) 星野猷二・三木善則『器瓦録想 其の二伏見城』伏見城研究会 2006年  
調査区西に位置する桃山福島大夫町北町41の発掘調査で、類例が出土している。この飾瓦については、「三つ巴文の飾瓦の出土するのはこの一帯に限定されている。」という見解が示されている。

# 圖 版





1 1区第1面全景（北から）



2 1区第2面全景（北東から）



1 1区石垣抜取跡3中央断面（北から）



2 1区石垣抜取跡3（北東から）



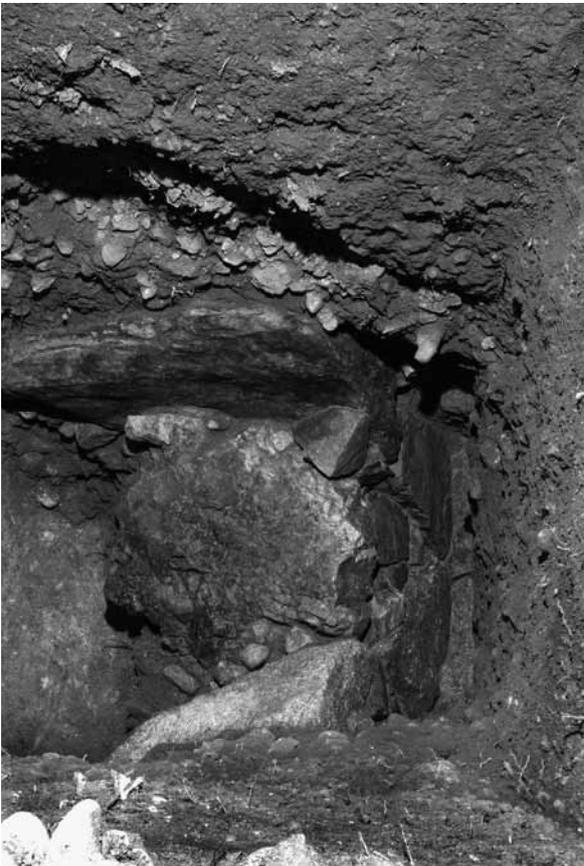
3 1区石垣抜取跡3根石（北から）



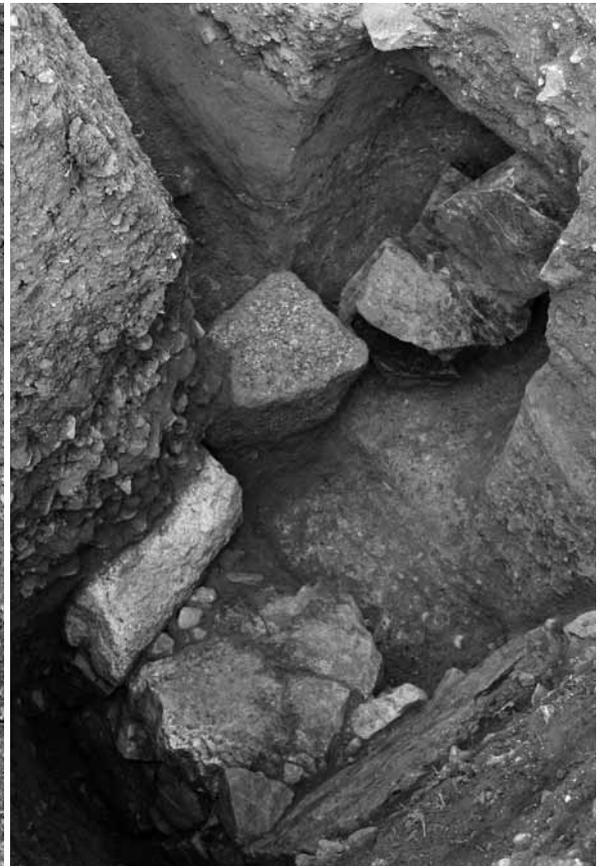
1 2区全景（北東から）



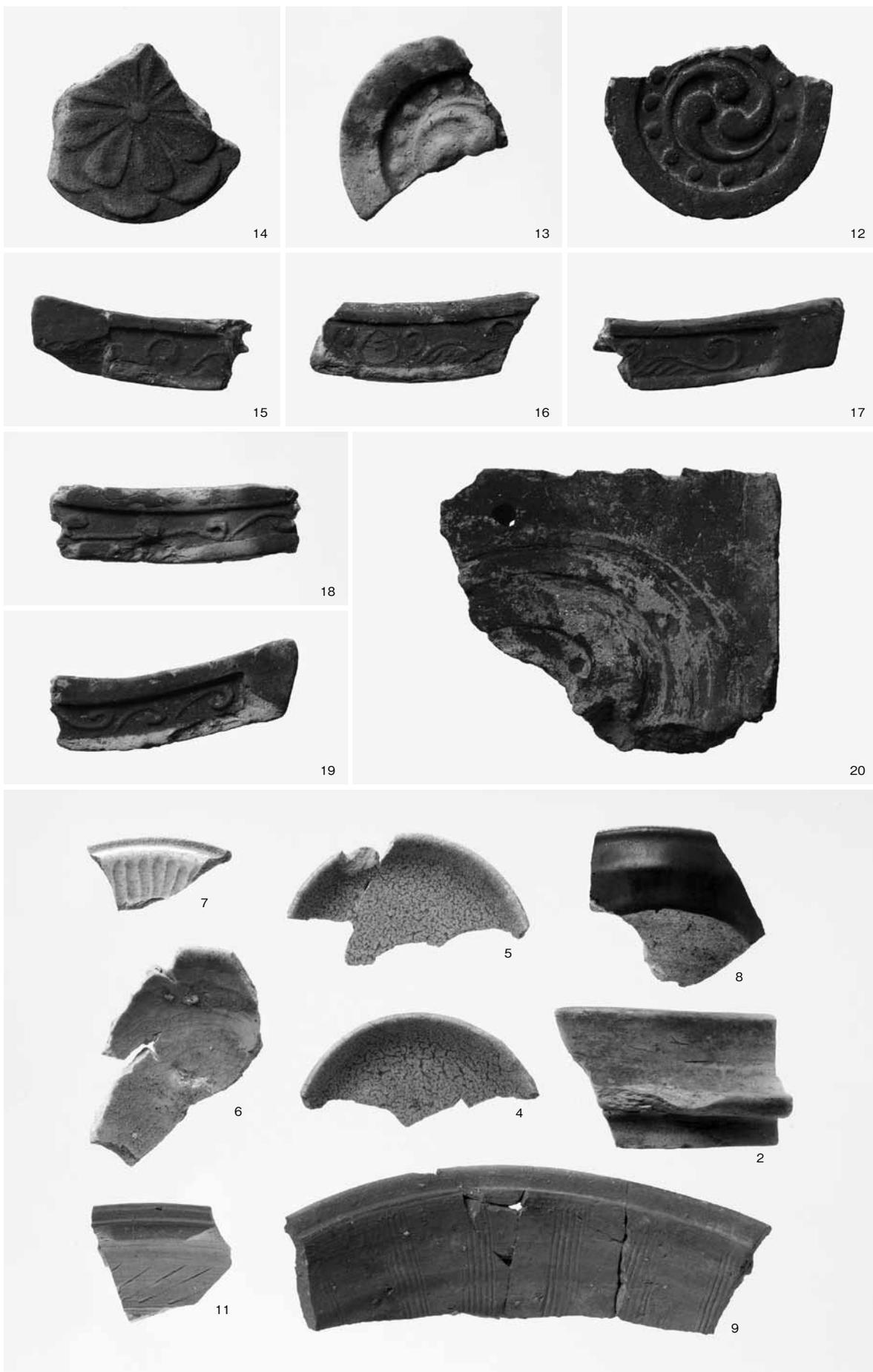
2 2区石垣2検出状況（東から）



3 2区石垣2基底部（北から）



4 2区石垣2東西石列検出状況（南西から）



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ふしみじょうあと・ももやまこふんぐん							
書名	伏見城跡・桃山古墳群							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2015-10							
編著者名	山下大輝							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2016年1月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあと 伏見城跡 ももやまこふんぐん 桃山古墳群	きょうとしふしみく 京都市伏見区 ももやまちょうしまづ 桃山町島津  47-25	26100	1172  1173	34度 56分 22秒	135度 46分 17秒	2015年9月 28日～2015 年10月20日	168.0㎡	住宅建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
伏見城跡  桃山古墳群	平城跡  古墳	安土桃山時代	石垣、石垣抜取跡	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、軒丸瓦、軒平瓦、金箔瓦、丸瓦、石製品		安土桃山時代の伏見城城下町の伊達街道に伴う石垣、雛壇造成に伴う石垣の抜き取り痕跡を確認した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-10

## 伏見城跡・桃山古墳群

発行日 2016年1月29日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961